

「健康で文化的な最低限度の恋愛」

登場人物

富岡ミキ (27 / 35) .. 恋愛ケースワーカー

後藤正則 (35) .. 元恋愛保護受給者

杉原祐一 (36) .. 恋愛ケースワーカー

榊原リン (25) .. 恋愛ケースワーカー

インタビュアー .. 撮影、ナレーター

ミキ役の子役 (10)

生徒たち

○小学校の教室

生徒たち数名が、正面のプロジェクターを見ている。画面には『健康で文化的な最低限度の恋愛保障 ～恋愛ケースワーカーのお仕事～』の文字。

傍らには美しい女・榊原リン(28)が立っている。

リンの首には『東京都福祉局恋愛保護課 第一係 主任 恋愛ケースワーカー 榊原リン』というネームプレート。

リンが手に持ったリモコンを操作すると『恋愛保障制度』の資料が映し出される。

リン「今から十年前。独身者の約六割が危機的な『恋愛弱者』という事実が、社会問題となりました。性交経験はおろか、キスなんて夢のまた夢……」

生徒たち「(くすくす)」

リン「そんな恋愛弱者の為、2027年に施行されたのが『恋愛保障制度』。その制度を支えるのが、我々恋愛ケースワーカー

なのです」

他の生徒が退屈そうに話を聞く中、キラキラした表情でリンを見つめる、

富岡ミキ(10)。

(音声がおフに)

リン、リモコンを操作して、何枚もスライドを見せていく。元は冴えない男性が、垢抜けて、リンと映るビフォーアフターの写真が何枚も。皆、幸せそうだ。横に写るリンも美しく輝いている。

リン、時には目に涙を浮かべ、熱弁する。さらにスライドを更新するリン。

『恋愛保護法の導入前後の既婚率…出生率の変化』というスライド。棒グラフで『30代既婚率…導入前／導後』『年間出生率…導入前／導入後』が表示される。既婚率、出生率とも、導入後に大幅に伸びていることが示されている。そこでスライドが終わる。

(音声オン)

リン「私、恋愛って素晴らしいことだと思うんです！ 私がそれを伝えて、幸せな人が増えてくれたら、こんなやりがいには他にありません」

ミキ、勢いよく立ち上がる。

ミキ「私、恋愛ケースワーカーになる！！」

リン、生徒たち、驚いた顔。

ミキ「リンさんみたいな恋愛ケースワーカーになって、たくさんの人を幸せにする！」
ナレーション「この時、ミキさんの人生は決まったのです」

ミキ、立ち上がった状態で静止画。

力強い音楽がカットイン。

ミキの再現ビデオだったことが分かる。

テロップ『2028年9月 小学4年生

ミキの決意』

○東京都福祉局・廊下（朝）

颯爽と歩いているミキ（27）。

ミニスカートのスーツにヒール、洗練されたメイクとヘアスタイルで隙がなく美しい容姿。首からさげたネームプレートには『東京都福祉局恋愛保護課第一係主任 恋愛ケースワーカー 富沢ミキ』。

ナレーション「十年後、ミキさんは小学生の時に誓ったその志を見事実現。大学在学中に、恋愛ケースワーカー資格試験に史上最年少で合格。しかも史上初の満点合格。

その後、新卒で東京都福祉局恋愛保護課に恋愛ケースワーカーとして入職しました。着実に実績を挙げ、現在は27歳の若さで主任として活躍中。本日はそんなミキさんの一日に密着します」

『恋愛保護課第一係』とプレートがついたドアを開け、中へ入って行くミキ。

○同・恋愛保護課第一係・オフィス（朝）

ミキは自席に座り、パソコン1台と複数のアイパッドを手早く起動。

インタビュアーの声（以降声のみ）「お一人
で何人くらいを担当されているんですか？」
ミキ「33人です。平均より、ちよつと多い
ほうですかね」

テロツプ「恋愛ケースワーカー一人あたりの
担当受給者の平均は25人前後」

パソコン画面を後ろからカメラが映し、
インタビュアー「拝見しても？」

ミキのパソコン画面には、男性のカルテ
情報らしきデータが。

そこには30名近い男性。
皆ぼかしが入っているが、太っていたり
頭髪が薄かったり、服装がダサイことは
分かる。

インタビュアー「良ければメッセージのやり
とりを見せて頂いても…」

ミキ「いいですよ」

『久しぶりに△△君に会えて嬉しかった。』

またご飯行こうね』

『起きてる？眠れなくて連絡しちやった』

『△△君にしか相談できない悩みがあつて
…今日会えないかな?』

『今週もお仕事頑張つて! 会えなくて寂
しいけど我慢…笑』

『□□君、私のこと好き?』

…どれも好意を匂わせ、絶妙に相手の心を
くすぐるメッセージだ。

× × ×

ミキ、パソコン上のカルテにテキストを
手早く入力していく。

インタビュアー「何をされているんですか?」

ミキ「やりとりの履歴はすべて残しておくん
です。受給者の恋愛コミュニケーションス
キルの向上の記録になりますから」

インタビュアー「ひとりひとり、丁寧に対応
されてるんですね」

ミキ「もちろんです。上司からは、ボットの
オペティマイズに任せてもいいとは言われ
ているんですが、私は必ず自分で考えてお
返事してますね。その方が受給者の方に真

心が伝わると思うので」

インタビュアー「さすがのプロ意識です」

カメラ目線になって微笑むミキ。

○カフェ・店内

テーブル席に横並びで座っているミキと、

後藤正則（35）。

インタビュアー「本日は、ミキさんが担当していた元受給者の方に取材させていただけることになりました」

テロップ「元受給者 後藤正則さん（仮名）」

35歳」

インタビュアー「最初に、実はミキさんが恋愛ケーススワーカーであると告知された時はどう思いましたか？」

後藤「そりゃ、最初はショックでしたよ。本当の恋愛じゃなかったんだって」

ミキ「立場を隠し、自然な出会いを装って受給者に接触する。それが恋愛ケーススワーカーの鉄則ですから。でも……後藤さんのこ

とは本気でしたけどね」

ミキ、後藤の手にそっと自分の手を添え。

後藤「（微笑んで）あ、もう、そういうのは

大丈夫ですから」

後藤は手を引き、また正面を向いて、

後藤「でも、いまは理解していますよ。誰だって自分が受給者だなんて事実は受け容れたくないですからね。最初から『私は恋愛ケースワーカーです』と正直に言われていたら、心を開けなかったと思います」

インタビューア「心を開けなければ、恋愛には至らないですもんね」

後藤「ええ。自然に出会って恋に落ちたんだと思わせていてくれたおかげで、僕も、自分にだって恋愛が出来るんだという自信がついたんです。僕、ミキさんと出会った当初は酷かったですもん。いまより3キロ以上太ってたし、服もダサダサで」

ミキ、微笑んで頷く。

インタビューア「そうやって自信がついたお

かげで、いまは恋人もいらつしやるとか？」

後藤「はい。実は先日、プロポーズしました」

と、左手を見せる。薬指に指輪。

ミキ「（一瞬表情を固くし）わあ、おめでとうございます」

× × ×

最後にミキ、カメラ目線で。

ミキ「え？目標ですか？　そうですね……。

いつか私も素敵なお恋がしたいな……なんて」

インタビュアー「それは、引退後ということですかね？」

ミキ「もちろんです！それまでに一人でも多くの恋愛弱者の方を救えるよう、全身全霊で頑張ります！」

と、カメラ目線で微笑むミキ。ミキの胸元に『東京都福祉局』のロゴマークが入る。

力強い音楽がカットイン。

テロップ『恋愛弱者に、恋愛の素晴らしさを伝える 恋愛ケースワーカーのお仕事 終』

○店前

笑顔で手を振って去っていくミキを、
見送る後藤。

インタビュアー「……もうオフレコなんで、
ぶっちゃけでお願いしたいんですが」

後藤「え、なんです？」

インタビュアー「後藤さんに今、仮に恋人が
いないとして。さらに仮にミキさんが明日、
ケースワーカーを辞めるとしたら……ミキ
さんと普通に恋愛したいと思えますか？」

後藤「うーん、それはいいですね。ミキさん
って完璧じゃないですか。完璧すぎて不自
然というか……あ、お世話になったのに失
礼ですよ。忘れてください」

○東京都福祉局・恋愛保護課第一係・ドア外
テロップ「8年後」

大きな花束を抱え、出てきたミキ(35)。
ミキ「新卒から今まで、大変お世話になりま
した(とお辞儀)」

内側からパチパチパチと拍手の音。

○道（夕）

花束を抱えて歩くミキ。花が邪魔で、向いから来た自転車が見えず、ぶつかりそうになる。

男の声「あぶない！」

通りかかった男性がミキの肩を掴んで、衝突を回避してくれる。

はずみで、抱き合う形になるミキと男性。男性の名は杉原祐一（36）。

ミキ「ごめんなさい！（慌てて身体を離す）」

杉原「いえ：大丈夫でしたか？」

ミキ、杉原と目が合う。

杉原、品の良さそうなイケメンである。頬を染めるミキ。完全に一目ぼれだ。手元をみると、杉原も小さい花束を持っている。

杉原「なんだか、すごい花束ですね」

ミキ「：実は今日、退職日で」

杉原「え！ 僕もなんです。こっちは小さいけど（笑）ちよつと分けてもらえませんか？」

ミキ「え？」

杉原「冗談です」

ミキ「あ：あはは」

杉原とミキ、顔を見合わせて、笑う。

恋が始まりそうな瞬間――。

○東京都福祉局・別館・廊下（朝）

颯爽と歩く男性の足音。

『恋愛保護課第二係』というプレート。

ドアを開ける男性の手。

○同・同・恋愛保護課第二係・オフィス

自席に座り、パソコンをカタカタと触るのは：杉原だ。

首からさげたネームプレート『東京都福祉局恋愛保護課第二係 主任 恋愛ケー
スワーカー 杉原祐一』。

パソコンに表示されたカルテデータには

『受給者ナンバー329・富沢ミキ』の情報。
ミキの顔写真。

ミキのカルテの『受給理由』欄に『長年、恋愛ケースワーカー職に従事していたことによる、自然恋愛能力の著しい減退』とメモが書かれている。

杉原「……」

ピコンピコンとスマホの通知。

杉原がスマホを開くと、何人もの女性受給者とのやりとりが。

その中のひとりから、立て続けにメッセージが来ている。

『久しぶりに杉原君に会えて嬉しかった。
またご飯行こうね』

『起きてる？眠れなくて連絡しちゃった』
『杉原君にしか相談できない悩みがあつて……今日会えないかな？』

『今週もお仕事頑張つて！会えなくて寂しいけど我慢……笑』

『杉原君、私のこと好き？』

アイコンはミキの顔写真。

杉原、無表情で、スマホを操作してLINE
を返す。

『うん。好きだよ！ミキちゃん』

(完)